

統一ドイツにおける同盟90・緑の党の展望

～グリーン・ポリティクスの方へ～

丸 山 仁

1. はじめに

1994年の連邦議会選挙において、緑の党は全ドイツで7.3%の得票率（49議席）を獲得し、悲願であった連邦議会への復帰を果たした（表1）。83年の議会進出は、久々の第4党の登場として、すなわち61年以来かたく閉ざされてきた「3党制カルテル」を初めて打破したという意味で快挙であった。今回の復帰は、敗者復活そのものがドイツの政党政治史上初めてであるという意味で、また長らく3党制カルテルの一角を担ってきた自由民主党（FDP-6.9%で47議席）を抜き去り、議会内第3党の地位を確保したという意味でやはり画期的な出来事であった¹⁾。

もちろんカムバックを果たした緑の党は、もはや83年当時の緑の党ではない。統一後初めての総選挙（1990年）では別々に戦い、明暗を分ける形となった西の緑の党と東の同盟90は、93年に正式に統一されていた（全国政党としての同盟90・緑の党の誕生）。そして何より現在の同盟90・緑の党にかつての「抵抗政党」、「運動政党」、あるいは「反政党的政党」の面影を重ねることは困難である。緑の党復活の主たる内部的要因を「脱ラディカル化」に求めるベツツは、端的に「かつての抵抗者と反政治主義者の雑多な集合」は「政治的エスタブリッシュメントのノーマルな一部となった²⁾」のだと評している。つい最近まで彼ら自身が世界に発信していたメッセージによればこうである。すなわち緑の党は「より大きな責任を引き受けるようになった（端的な事例として挙げられているのがアンティエ・フォルマーの副議長就任）」のであり、「依然としてエコロジー的、社会的、女性及び男性の諸権利（の擁護）、平和主義といった諸原理に忠実ではあるが、決して立ち止まっているわけではない」。同党の発展は「抵抗政党から改良政党への道」に沿っているのであり、現在では「実現可能性という基準を政策構想に適用することで合意している³⁾」というのである。

1) 例えば以下の文献は、連邦議会への復帰そのものをドイツ政治史上画期的なものとして評価している。Thomas Scharf, "The German Greens: a political profile," in Ingolfur Blühdorn/Frank Krause/Thomas Scharf, eds., *The Green Agenda*, Keele University Press, 1995, p.131.

2) Hans-Georg Betz, "Alliance90/Greens: From Fundamental Opposition to Black-Green," in David P. Conradt/Gerald R. Kleinfeld/George K. Romoser/Christian Sjøe, eds., *Germany's New Politics*, Berghahn Books, 1995, p.203. (以下本論文集を *New Politics* と略記) なおこの点にかかわって象徴的な数字をあげておこう。緑の党が連邦議会に初めて進出した1983年には、国民の53%が「緑の党が連邦議会に存在することを好ましくない」と判断していた（肯定的に評価していたのはわずかに28.4%）。ところが90年には逆に63.9%の国民が「好ましい」（否定は35.9%）と判断するようになったのである。国民の認知という点で言えば、明らかに緑の党はアウトロー的な存在から「まともな議会内政党」へと変貌したのであり、その意味ではまさに「体制内化」したのだ（もちろん逆に、そのことでいかに体制の側が「揺らぎ、変貌したのか」も問われるのだが）。

Hans-Joachim Veen/Jürgen Hoffmann, *Die Grünen zu Beginn der neunziger Jahre*, Bouvier Verlag, 1992, S.159. (ただしアデナウアー財団調査による)

3) 連邦議会党派「同盟90・緑の党」のホームページに「自己紹介」として掲載されていた文書による

「依然として若々しいが、成長もしたのだ」。この彼らのメッセージをどう受けとめるべきなのであろうか。本論文は、統一後のドイツを新しい舞台とした緑の党の発展・変容過程の力学を多角的に検討しようとするものである。同時に「現実化」、「既成政党化」として把握されることの多い同過程の政治的意味を再度問い直すことで⁴⁾、成熟した「緑の改良政党」の今後を展望する際の一助としたい。

2. 有権者の政治的嗜好と同盟90・緑の党の展望

(1) 同盟90・緑の党の支持基盤

まずは緑の党研究の常識となっている同党の典型的な支持者像を確認しておこう⁵⁾。社会的属性として言えばまずもって「若年、高学歴」であり、加えて「世俗的な新中産階級で都市居住者」であった。イデオロギー的な自己認知としては「左翼的」、価値観のタイプは「脱物質主義」である。こうした支持者像については、先の94年総選挙の分析においても基本的に追認されており、ことさら論じるまでもないだろう⁶⁾。本節では、特に注目すべき新しい動向についてのみ検討する。

東西の格差について

94年の総選挙は、「統一」ドイツの内はまだ「2つの政党制」が存在することを明らかにした(表1)。西部ドイツにおける「CDU/CSU-FDP-SPD-緑の党」の4党制と、東部ドイツにおける「CDU/CSU-SPD-PDS」の3党制である⁷⁾。同選挙で同盟90・緑の党は、西側の全州において5%を越える得票率を獲得した(ザールラントの5.8%からハンブルクの12.6%まで)のとは対照的に、ベルリンを除く東部の新州においてはいずれも5%の「象徴的な」ハードルを越えることができなかった(ザクセン、チューリンゲンの4.8%からブランデンブルクの2.9%まで)。

カルテフライターはこの結果を、端的に以下のように分析している。すなわち「緑の党は、

(1997 現在)。Bundestagsfraktion Bündnis 90/Die Grünen, Von der Protestpartei zur Gestaltungspartei-*Opposition und drittstärkste Kraft*, <http://www.gruenebt.de>. 次の段落冒頭の表現も同文書による。なお以下の文献の冒頭に同じ文書が英文で掲載されている(ただし若干表現が異なる)。Bündnis90/Die Grünen, 49 Bündnis Grüne in the Bundestag, 1996. 同文献は連邦議会議員を紹介するパンフレットである。以下特にことわらないが、役職等についてこの文献、及び以下の文献末尾の「市民運動出身連邦議会議員一覧」を(90年総選挙分)参照した。Helmut Müller-Enbergs/Marianne Schulz/Jan Wielgoß (Hrsg.), *Von der Illegalität ins Parlament*, Ch.Links Verlag, 1992, S.393-403.

- 4) このモチーフで書かれた筆者の別稿として以下を参照。同論文は、統一直後までを対象として、もっぱら緑の党の組織実践のあり方に絞ってその変容の意味を問うたものである。丸山仁「オルタナティブ政党としての緑の党」(『名古屋大学法政論集』, 第146号), 1993年, 103-150頁。(以下「オルタナティブ政党」と略記)
- 5) 日本における本格的な支持基盤分析として、坪郷実「西ドイツ『緑の党』の支持者像について(上)(下)」(『北九州大学法政論集』第13巻第2号, 4号), 1986年。また筆者自身のものとして丸山「西独政党システムと『緑の党』(一)」(『名古屋大学法政論集』, 第122号), 1988年, 137-161頁(以下「緑の党(一)」と略記)
- 6) 94年総選挙の投票行動全般の簡便な分析として、例えば以下の文献を参照。"Wer wie gewählt hat," in *Die Zeit*, 21. Oktober 1994, S.6. Wolfgang G.Gibowski, "Germany's General Election in 1994: Who voted for whom?," in *New Politics*, pp.105-148.
- 7) これはもちろん比喩であるが、近年東部の州議会選挙においては文字通り現実のものとなっている。西部においては若干のバリエーション(FDPが欠ける、あるいは他の小政党が加わる)が存在するものの、PDSが欠ける点は共通である。

表1. 連邦議会選挙結果（得票率は％，括弧内は議席数）

	1990年		1994年	
		西 部	東 部	合 計
キリスト教民主/社会同盟(CDU/CSU)	43.8(319)	42.2	38.5	41.5(294)
自由民主党(FDP)	11.0(79)	7.7	3.5	6.9(47)
ドイツ社会民主党(SPDP)	33.5(239)	37.6	31.5	36.4(252)
同盟90/緑の党	*3.8/1.2(8)	7.8	4.3	7.3(49)
民主社会党(PDS)	2.4(17)	0.9	19.8	4.4(30)
共和党	2.1(0)	2.0	1.3	1.9(0)
その他	2.1(0)	1.9	1.1	1.7(0)

*前者が緑の党(西)の、後者が同盟90/緑の党(東)の全国得票率である。8議席というのは東の同盟90/緑の党が、東独部のみの得票率で5%を越えた(6.2%)のために特例的に獲得した議席である(この選挙に限り5%条項が東西別々に適用された)。

出典：R.J.Dalton, eds., *Germans Divided*, p.13を一部加工した。

近代の豊かな社会の表現(とりわけ成長とテクノロジーへの敵意によって特徴づけられる)であり、こうした指向性は「新しい諸州の経済情勢の下ではほとんど共鳴を呼ばなかった」。その結果「同盟90・緑の党は、新しい諸州においてはその議会基盤を喪失し、一方で旧諸州の過剰社会においてはその地位を確立した」⁸⁾。こうした評価が的を得ていることは、東西の選挙民の価値指向(表2)の、また争点指向の分布状況から確認できる⁹⁾。同盟90・緑の党は、ニューポリテクス指向の「脱物質主義的左翼」の政党として認知されており、東部ドイツにおいてはそうした指向性に呼応する社会層が未成熟なのである。つまり同党は、西部ドイツにおいては明瞭に「左翼的な脱物質主義者の党」であるのに対して、東部ドイツにおいては当面「どちらかと言えば脱物質主義的な左翼の党」にとどまるしかないのである。また同盟90・緑の党が強調する「環境問題」への注目度に関して言えば、西部ドイツの有権者の13%が最も重

表2. 西部ドイツ, 東部ドイツの価値指向(%)

	西部ドイツ		東部ドイツ	
	*固定投票者	全 体	固定投票者	全 体
左翼脱物質主義	56	18	16	7
右翼脱物質主義	4	6	2	2
左翼混合型	26	24	53	45
右翼混合型	11	29	14	18
左翼物質主義	1	9	9	16
右翼物質主義	2	13	5	11

* Stammwähler

出典：R.Schmitt-Beck, "Wählerpotenziale," S.215. (Allubus, 1992)

8) Werner Kaltefleiter, "Deutsche Parteiensystem nach den Wahlen von 1994," in *Zeitschrift für Politik*, 42. Jg., Heft 1, März 1995, S. 22.

9) Rüdiger Schmitt-Beck, "Wählerpotenziale von Bündnis90/Die Grünen in Ost-West-Vergleich," in Lothar Probst (Hrsg.), *Kursbestimmung: Bündnis90/Grüne*, Bund-Verlag, 1994. (以下同論文を"Wählerpotenziale"と略記) 価値指向に関しては、同論文のS.214-216, 争点指向に関しては、S.217-220参照。なお「最も重要な」というのは、正確には「最も重要な2つの問題の内の1つである」という判断を意味する。

要な課題の1つであると認識している（1位は40%の庇護権問題）のに対して、東部ドイツの有権者の6%しかそうした認識を示していなかった（圧倒的な1位は失業問題で63%）。さらに言うならば、東部ドイツにおいては、一方に「より物質主義的な左翼の党」としてのPDSが存在し、現状においてはそうした指向性に呼応する社会層の方が断然「厚い」のだと見るべきであろう。けだし「静かな革命」は決して一夜にはならないのだ。

統一直後の総選挙においては、西部ドイツも含めて伝統的な諸争点（統一問題というナショナリズムにかかわる争点と、同問題に起因する経済的な諸争点を中心とする）が新しい諸争点を圧倒していた。これが西側の緑の党には著しく不利に作用する一方で、「東の」同盟90・緑の党には、いまだ「東独革命」の真の立役者としての威光がわずかに残されていた（その結果が西部のみで4.8%、東部のみで6.2%という得票率である）。今回の選挙結果は、相対的に西側社会が落ち着きを取り戻し、一方でPDSが「東の利益を代弁する」地位を、しかも「左側から」独占するに至った当然の帰結であろう。従って長期的には、今後の復興次第とはいえ、東部においても脱物質主義的価値観が浸透し、新しい諸争点を受容されるにつれて、同盟90・緑の党にとっての「潜在的な」チャンスは拡大することが予想される（次節、また中・短期的に同党が受ける影響及び党の対応に関しては3章参照）。

性差について

日本ではほとんど注目されなかったようであるが、94年総選挙ですべての年齢集団において女性の支持率が男性を上回った唯一の政党が同盟90・緑の党であった¹⁰⁾。また2大政党への投票者の男女構成比が、社会全体のそれ（48%対52%）にほぼ対応していたのに比べて、同盟90・緑の党は女性に（44.2%対55.8%）、逆にFDPは男性に（51.3%対48.7%）傾いていた（表3）。こうした傾向は特に西側の若年女性において顕著である。18-24歳、25-34歳、35-44歳について言えば、それぞれ実に16.8%（男性では13.4%）、15.5%（13.1%）、14.0%（10.7%）が同盟90・緑の党に投票したのである。

表3. 94年総選挙における各政党支持者の性別・年齢別の割合(%)

年 齢	選挙民全体	CDU/CSU	SPD	FDP	同盟90/緑の党	PDS
全 体						
男性	48.0	47.1	48.2	51.3	44.2	49.9
女性	52.0	52.9	51.8	48.7	55.8	50.1
18-24						
男性	5.2	4.4	4.6	5.0	9.0	5.6
女性	4.7	3.5	4.7	4.2	10.1	5.9
25-34						
男性	9.1	7.7	9.1	7.5	14.2	10.6
女性	8.6	6.0	10.0	6.1	16.5	10.9
35-44						
男性	8.1	7.0	8.7	8.3	10.4	9.2
女性	8.0	7.3	7.9	7.5	13.0	9.4
45-59						
男性	12.4	13.3	12.4	15.6	6.6	11.0
女性	12.4	13.6	12.2	13.0	8.3	11.9
60-						
男性	10.0	11.6	9.5	12.2	2.5	9.6
女性	15.1	19.3	13.4	15.8	6.6	8.9

出典：Eva Kolinsky, "Women and the 1994 Federal Election," p.268.

10) 文献は注6)参照。2大政党に関して言えば、若年女性はSPDを、高齢になるほどCDU/CSUを支持する傾向にある。

緑の党が始めから女性に優遇される党であったわけではない。結党後最初の2回（80年と83年）の総選挙においては、全く逆に男性の支持が全体として女性を上回っていた。「緑の党の反性差別主義的な諸政策、また積極的な女性へのクォータ制の導入にもかかわらず」である。ようやく87年の総選挙において若年層において逆転傾向が生じ、94年の総選挙で遂に緑の党は「あらゆる年齢層において女性の利益を代表する党」としての地位を確立したのである¹¹⁾。東部ドイツにおいては男女を問わずPDSが「東の利益政党」として広く認知されているために、同盟90・緑の党のこうした性格はそれほど顕著には現れていない¹²⁾。しかし少なくとも西部においては、「緑の党が女性問題の解決にはもっとも有能な政党である」という認知が浸透してきたのであり、それゆえ「こうした争点を自らの個人的な優先リストの上位に位置付ける女性の多くは、既成政党よりも同盟90・緑の党を選好する傾向にある」のだと言えよう¹³⁾。

象徴的な事例を一つだけ挙げておこう。現在ドイツでは、緑の党の先駆的な問題提起に触発されたかのように、候補者リストへの「クォータ制（女性への優先的な割り当て制度）」導入の動きが盛んである。先の総選挙においては緑の党が「少なくとも50%」、PDSが「60%まで」、SPDが「30%以上」、CDU/CSUが「25%」、FDPが「0-50%（つまり割り当て制度は採用しない）」という基準（上位30人中）に沿ったリストで選挙を戦った¹⁴⁾。結果同盟90・緑の党は、29人（49人中）の女性議員を連邦議会に送り込んだのである（ただし現在は28人）¹⁵⁾。先に論じたPDSの例を除けば、クォータ制への取り組みの温度差が、そのまま女性の政党支持の温度差に反映している（同盟90・緑の党-SPDとCDU/CSU-FDPの順）ことが見て取れるだろう¹⁶⁾。

-
- 11) なお筆者は、87年の総選挙を分析する際にすでに若年女性の支持率の高まりに注目していた。そこでも私見を述べておいたが、緑の党への女性の支持が高まってきた背景には、党の女性政策への理解が浸透してきたことに加えて、とりわけチェルノブイリショックに触発されて相対的に「女性の」環境意識がより高まったことがあると考えられる。その点も含めて別稿参照。丸山「緑の党（一）」、152-154頁。
- 12) 先に数字をあげた若年女性について言えば、東部ドイツでは、18-24歳、25-34歳、35-44歳の女性の10.9%（男性の10.2%）、8.6%（4.4%）、3.9%（4.3%で男性の方が高い）が同盟90・緑の党を支持していた。
- 13) Eva Kolinsky, "Women and the 1994 Federal Election," in Russel J. Dalton, ed., *Germans Divided: The 1994 Bundestag Elections and the Evolution of the German Party System*, Berg, 1996, p. 285.
- 14) *Ibid.*, p. 277. ただしSPDが1988年のミュンスター党大会において掲げた割り当て目標は、党役員、議員ともに40%である。またCDUの現在の割り当て目標は30%である。なおFDPがクォータ制を否定していた点であるが、これを「単に」同党の男性中心的な性格ゆえだと評価することは慎むべきかもしれない。同党も公式に女性議員・役員の比率を「女性党員数の割合に一致させる」ことを「努力目標として」提示している。しかしそのリベラリズムの信条（この場合は「機会」均等の原則）ゆえに、強制的なクォータ制の導入には批判的なものであり、自らの理念に忠実な姿勢であることは確かである。以下の文献参照。
- Thomas Poguntke/Hermann Schmitt, "Die Grünen: Entstehungshintergrund, politisch-programmatische Entwicklung und Auswirkung auf andere Parteien," in Josef Schmid/Heinrich Tiermann (Hrsg.), *Aufbrüche: Die Zukunftsdiskussion in Parteien, Verbänden und Kirchen*, SP-Verlag, Marburg, 1990, S. 186.
- 15) 実際に当選した女性議員総数176人の内、同盟90・緑の党以外の政党が占める人数は、SPDが85人、CDUが35人、PDSが13人、FDPが8人、CSUが6人であった。なお96年の末に、旧東独出身の連邦議会議員ヴェラ・レンクスフェルト（＝ヴォレンベルガー）女史がCDUへ移籍したために、同盟90・緑の党の議員団は現在48名（内女性28名）である。彼女は東の反体制的な市民運動家として89年に「東の」緑の党の代表に選出され、90年の総選挙で当選した2人の緑の党の議員の一人でもあった。同盟90・緑の党と民主社会党PDS（旧社会主義統一党）との接近を危惧しての離党である。
- 16) ドイツの伝統的な女性観が、典型的な「家庭婦人」としてのそれであることは良く知られている。従って女性の社会（政界）進出を特に要求している若年世代に限定するならば、SPD-CDU/CSUの順序についても同様に考えることができる。注10)も参照。

年齢について

年齢別の投票行動の全体像は、80年代から90年代にかけてほぼ安定している。すなわち35-44歳という年齢区分を境に、CDU/CSUが「高齢者の党」、SPDが比較的「若年層の党」、そして緑の党が圧倒的に「若者の党」である。ただし近年の同盟90・緑の党への投票に絞って分析するならば、若干の、しかし同党の今後を展望する際には重要な変化が見られる。すなわち80年、83年の2回の総選挙においては完全なピラミッド型（最若年層から最も高率の支持を獲得し、加齢とともに支持率が低下する）であった支持構成が、下から平準化する傾向を見ているのである（表4）。特に西部ドイツに注目すれば（東部ドイツにおいて同盟90・緑の党は、いまだ全くの新党であり、同列に比較しえない）、同盟90・緑の党は25-34歳の年齢層では最若年層とほぼ同程度の、35-44歳という年齢層においてもそれほど遜色のない支持を得ている。同盟90・緑の党は、もはや単に「(20代以下の)若者の党」であるとはいいがたいのである¹⁷⁾。

表4. 94年総選挙における年齢別政党支持率

西部ドイツ					東部ドイツ				
年齢	CDU/CSU	SPD	FDP	同盟90/緑の党	CDU	SPD	FDP	同盟90/緑の党	PDS
18-24	34.2	36.3	6.8	14.9	29.2	25.8	3.7	10.4	22.6
25-34	32.2	41.1	5.7	14.1	31.2	32.3	3.4	6.4	23.0
35-44	36.4	39.3	7.2	12.2	37.7	31.6	4.2	3.9	21.4
45-59	45.6	37.5	8.6	4.5	39.5	32.8	3.9	3.3	19.0
60-	50.7	34.9	8.5	2.5	45.2	31.5	2.9	2.3	16.9
合計	42.1	37.5	7.7	7.9	38.5	31.5	3.5	4.3	19.8

出典：W.G.Gibowski, "Germany's General Election in 1994," pp.117-118を一部簡略化した。

シュミット-ベックは、一貫して緑の党支持の主要な源泉となってきた年齢層を、特定の政治的世代、「プロテスト世代」と規定していた¹⁸⁾。すなわち「50年代初めから60年代の末にかけて誕生し」、「政治的社会化の形成期は60年代の半ばから80年代初期の間」、ということは学生反乱から新しい社会運動の動員期までに多感な時期を過ごした世代である。それゆえ彼らは同盟90・緑の党を「新しい社会運動が制度化されたもの」とであるとみなして共感するのである。こうした見地からは、同盟90・緑の党のより安定した支持基盤は現在ではもはや最若年層というよりはむしろ30代ないし40代前半ということになる。かつてのピラミッド型の支持構造を説明する際には、上記のような「世代(社会化)効果」に加えて、「ライフサイクル効果(一般に既存の社会エリート構造内を上昇するほど、つまり加齢につれて保守的な価値観を有するようになり、この場合は緑の党から離反しがちになる)」が援用されることが多かった¹⁹⁾。この点から言えば、今のところ「世代効果」が強力に作用している一方で、少なくとも

17) この傾向は87年総選挙の段階で既に生じていた。同選挙では、まだ35-44歳の年齢層における支持はそれほどではなかったが(平均8.3%に対して9.6%)、最若年層の18-24歳(15.5%)よりも25-34歳の方が高い支持率を示していた(17.4%)。文献は注5)参照。なお同数字については以下の文献参照。坪郷実『新しい社会運動と緑の党』、九州大学出版会、1989年、8頁。

18) R.Schmitt-Beck, "Wählerpotenziale," S.210.

19) 実は支持基盤の年齢構成分析は、単に同党の今後の展望を論ずる際に重要なだけでなく、緑の党研究にとって大きな「理論的」合意を有している(とりわけ同党の成功を説明するいくつかの理論的なモデルの検証に当って)。とりあえず以下の文献参照。なお「世代(社会化)効果」についてだが、

もその効果を打ち消すほどには「ライフサイクル効果」は効いていないことになる²⁰⁾。従って今後もこうした「世代効果」が持続し、一方で同党の成熟（穏健化、ないし現実化）が若年層へのアピール力を大きく減ずることがなければ、同党の未来は明るいことになるだろう（もちろん逆もまた真であるが）。

(2) 「潜在的」投票者層と同盟90・緑の党の選択

既に言及していた94年総選挙、また93年から96年までの各州議会選挙の結果から考えて、現在の同盟90・緑の党の支持率は西部ドイツで6-14%、東部ドイツで3-5%ほどであることが分かる²¹⁾。ではこうした支持率は、どの程度「確か」なものなのであろうか。あるいはそもそも同盟90・緑の党には潜在的にどの程度のチャンスがあるのか、先の支持率はそのチャンスをどの程度「生かした」結果なのであろうか。本節では、こうした問いに答える上で非常に興味深い知見を与えてくれるシュミッターベックらの「投票ポテンシャル分析」を検討する²²⁾。そのことで同盟90・緑の党の選挙政治上の展望がより明かになると同時に、同党のいわゆる「現実化」（後述）の背景にある冷厳な現実の一端が見えてくるはずである。

同盟90・緑の党の投票ポテンシャル

同盟90・緑の党に対して「多かれ少なかれシンパシーを有している」人は、西部ドイツで47%、東部ドイツでは60%である。論理的には（拒否されないという最も広い意味で）この数値が同党への投票者ポテンシャルの「上限」ということになる²³⁾。では、同盟90・緑の党を第一選好の政党として選択する人の割合はどうか。これは東西ともに12%である。さらに第二選好として同党を選択する人は、やはり東西ともに20%ほど存在する。ここまでの分析は、同盟90・緑の党の「潜在的な」チャンスが非常に大きいことを物語っている。しかし以上の指標に、安定した「政党アイデンティフィケーション」の有無及び実際の「投票意図」の有無を重ね合わせると、全く別の一面が見えてくる。

表5は、同盟90・緑の党への投票者ポテンシャルを4種類の投票者集団に区分し、それぞれの割合を示したものである。同盟90・緑の党を第一に選好し、かつアイデンティフィケーシ

もともとイングルハートの価値変動モデル（物質主義から脱物質主義への）において重視されていたのは「思春期の」「政治的」事件というよりも、むしろより「幼年期」の「経済的・社会的」環境（特に「豊かな社会」と相対的な平和）である。だからより正確に述べるとすれば、相対的に「初期の社会化効果」（こちらの前提条件は基本的に変化していない）が若年層全体の支持を下支えした上で、相対的に「後期の社会化効果」（こちらは当面特定の「プロテスト世代」に限定される）と「ライフサイクル効果」が対抗的に作用していることになる。丸山「緑の党（一）」、161-186頁。Thomas Poguntke, *Alternative Politics*, Edinburgh University Press, 1993, pp.16-33.

- 20) ただし近年の同盟90・緑の党の方針転換（後述）を前提とすれば、次の様な見方は成り立ちうる。つまりライフサイクル効果がそれほど効かないのは、同盟90・緑の党の方が「歳をとった（エスタブリッシュメントの一員となった）」からであると。もちろんその場合は逆に「にもかかわらず依然として最若年層からも相当高い支持を獲得し続けている」ことが説明されなければならない。
- 21) この間の西側の州議会選挙について言えば、最高がハンブルグ（93年）の13.5%、最低がザールラント（94年）の5.5%、ベルリンを除く東側では、最高がザクセン・アンハルト（94年）の5.1%、最低がブランデンブルクの2.9%（94年）である。
- 22) R. Schmitt-Beck, "Wählerpotenziale," S. 192-235. Thomas Poguntke/R. Schmitt-Beck, "Bündnis90/Die Grünen after the Fusion," in *German Politics*, vol. 3, No. 1. April 1994, pp. 99-106. (以下 "Bündnis90/Die Grünen" と略記) 投票者ポテンシャル分析に関して言えば、後者の文献は前者の文献の簡略化されたものである（ただし後者の文献の前半部分では、同盟90と緑の党の合同の経過が別途検討されており、有益である）。なおこの調査研究はそもそも、93年末に同党の委託によってまとめられたものである。従って当然同党の方針決定に反映されていると考えられる。3章も参照。
- 23) R. Schmitt-Beck, "Wählerpotenziale," S. 196.

ンを示す者が「中核的な潜在的投票者」であり、第一選好だがアイデンティフィケーションを示さないものが「周辺的な潜在的投票者」である。「シンパ」というのは、同党を第二選好とするものであり、シンパの中で最も多い集団、すなわちSPDを第一選好とするものが「社民党に近いシンパ」である。そして次の表6は、各潜在的投票者集団が現実にとどの政党に投票する意図を有しているかを示している。ここで同表は2つのことを意味している。1つは「中核的な潜在的投票者」の集団が、現実にかに「忠実な票田（西で5人に4人、東でも4人に3人は同党への投票意図を有している）」を形成しているかであり、もう一つはそれ以外の集団がいかにかに「当てにならない」かである。同党を第一選好とする周辺的な潜在的投票者の中でさえ、その6割以上は他党（特にSPD）に投票するか棄権してしまう可能性が高いというのである。

表5. 同盟90・緑の党の潜在的投票者 (%)

潜在的投票者の4類型	西部ドイツ	東部ドイツ
中核的な潜在的投票者	4	4
周辺的な潜在的投票者	8	8
社民党に近いシンパ	16	14
他政党に近いシンパ	3	6

出典：R. Schmitt-Beck, "Wählerpotenziale," S.200. (Politbarometer, 1992年)

表6. 各潜在的投票者類型内の投票意図 (%)

	中核的	周辺的	社民党	他政党	合計
西部ドイツ					
緑の党	81	38	7	13	8
SPD	8	26	79	1	36
CDU/CSU	0	7	0	38	31
FDP	0	2	1	16	5
極右	0	3	2	13	5
その他	1	4	1	2	2
棄権	9	20	10	15	11
東部ドイツ					
同盟90/緑の党	76	37	6	4	8
SPD	2	8	67	1	31
CDU	1	3	1	16	22
FDP	0	1	0	10	6
PDS	2	5	1	42	7
その他	4	10	4	9	7
棄権	14	36	21	17	19

出典：R. Schmitt-Beck, "Wählerpotenziale," S.202. (Politbarometer, 1992)

同盟90・緑の党の選択

無論ここで最大の問題は、頼りになる「中核的な潜在的投票者」がそれぞれ4%程度しか存在しないという点である。つまり同盟90・緑の党は、同グループの支持のみでは「5%のハー

ドル」を越えられない、ということは議会に進出できないのだ²⁴⁾。この点が兩大政党との決定的な違いである。別の言い方をすれば、同党の選挙での生き残り、まして成長は、「中核的な支持基盤をさらに固めるという戦略」によっては決して保証されないのであり、むしろ「中核的な支持基盤の外側に位置する投票者をどれだけ動員できるか²⁵⁾」、とりわけSPDの潜在的な支持基盤をどれだけ切り崩せるか、次に潜在的な棄権者の票をどれだけ掘り起こせるかにかかっているのである。

政党の路線問題を論ずる際に必ず持ち出されるのが、いわゆる「伝統的・固い支持基盤と新しい・周辺の支持基盤のトレードオフ」というディレンマである。例えばキツェルトは同盟90・緑の党のような「左翼リバータリアン政党」のディレンマをこう表現している²⁶⁾。左翼リバータリアン政党は、「既成諸政党に対する原理的反対というラディカルな戦略と、漸進的な政策変革を目指す妥協と協調という穏健な戦略との間で」困難な選択を迫られるのであって、前者を選択すれば「中核的な投票者は確保するだろうが、広い穏健なシンパを引き寄せることには失敗することになり」、後者を選択すれば「自らの中核的な支持者層の支持を失うかあるいは競合する諸政党に飲み込まれるリスクを背負うことになる」というのである。こうしたディレンマそのものは、確かにドイツの同盟90・緑の党にも存在するはずである。ただし議会政党として生き残ることを大前提とした場合、「当面」彼等に選択の余地はなかった²⁷⁾。いずれにせよ周辺の投票者を動員することなしに生き残れる確率は低いからである。

さらに「連合問題」に関しても、有権者の選好という観点から言えば、同盟90・緑の党の選択の余地はかなり限られている。先の区分で言えば、「社民党に近いシンパ」は当然のこととして、両「潜在的投票者」の多数意見（44%から80%）は「赤一緑」ないしFDPを含むいわ

24) そもそも「保守、リベラルからコミュニストまで、ラディカルから穏健派まで、エコロジストにフェミニストにパシフィストまで」が「緑」の旗の下に結集できた（せざるをえなかった）最大の制度的要因が、この「5%条項」の存在であった（象徴的には、穏健な「緑派」が単独で戦った79年欧州議会選挙での微妙な得票率、3.2%が、その直後に「左派ないしオルタナティブ派」との提携を促したのである）。合わせて緑の党の命運にとって同条項が決定的な意味を有していることが理解されるだろう。同盟90・緑の党自身はもちろん「小政党を排除する非民主的な制度」として同条項を批判している。ただし筆者自身は、少なくとも現実に同条項が果たしてきた機能に関して言えば、必ずしも否定的な評価をしていない。とりわけ一方で公費助成の条件が極めて低く（最低0.5%）設定されている（つまり議席は獲得できなくとも、ある程度の国民的支持があれば公的な援助がうけられる）ことを合わせて考えれば、加藤氏の次のような評価も無視しえない。すなわち同制度は、「戦前の反省から意識して育てあげてきた」ものであり、「未成熟な小党は、時間のテストにかけて成熟するかどうかをチェックするという考えが背後にある」というのである。そして緑の党のように、このテストに「パスして議会進出を果たした例もある」のだ（筆者の観点からは、「さらにパスし続けている」ことになるが）。Bündnis90/Die Grünen, *Programm zur Bundestagswahl 1994*, S. 33. 加藤秀治郎「ドイツの政治、日本の政治」（人間の科学社、1996年）、21頁。

25) 結局94年総選挙において同党は、西部ドイツでは大幅な周辺の投票者の掘り起こしに成功し、東部ドイツでは逆に「中核的な潜在的投票者」の割合に見合う程度にしか得票できなかったことになる。前節参照。

26) Herbert Kitschelt, "New Social Movements and the Decline of Party Organization," in Russel, J. Dalton/Manfred Kuechler, eds., *Challenging the Political Order*, Polity Press, 1990, P.199. (以下「Party Organization」と略記)

27) 筆者は既に別稿で政治的「ミリュウ論」の観点から同主旨のことを指摘している。ちなみに試算によると緑の党の中核的な支持基盤に重なる「オルタナティブミリュウ」のドイツ社会における構成比は、1983年で4%ほど、90年には2.3%ほどである。丸山「『新しい政党』と政党論の新展開」（『アルテスリベラレス（岩手大学人文社会科学部紀要）』、第60号、1997年）、184-185頁。（以下「新しい政党」と略記）

ゆる「信号連合」を 선호しているのである²⁸⁾。この連合問題（SPDとの連合の是非）こそ、結党以来の激しい党内論争（いわゆる「原理派」と「現実派」のそれ）の一大争点であった。しかしポグントケが明らかにしているように、この争点は有権者レベルでは既に80年代において決着がついていた。すなわち83年には緑の党の「支持者」の94%が、またその後「激しい党内論争が知られるようになったにもかかわらず」、87年総選挙の前においてもなお85%が「可能であれば、赤-緑連合を」希望していた。つまり党内では当初両派が拮抗、ないし党執行部レベルでは「原理派」の立場が優勢であったのに対して、一般の支持者の間では最初から「現実派」の立場が圧倒的に支持されていたのであり、この点をポグントケは端的に「緑の党は、選挙民との接触を失いつつあるのか？」と問うていたのである²⁹⁾。

本節の検討から、同盟90・緑の党の支持基盤が依然として本質的に脆弱であること、また同党の支持基盤になりうる有権者の多くがSPDとの連合政権を求めている（当然同党が「議会内責任政党」として成熟することが前提となる）ことが明らかにされた。こうした外的条件が同党に対する「現実化」の圧力として機能したであろうことは容易に理解される。次章では、同盟90・緑の党の変容過程を「内側から」検討することにしよう。

3. 統一ドイツの同盟90・緑の党

(1) 1994年の決着

「彼にとって1994年は、単に全国的な著名人への復帰を画しただけでなく、党の異論の余地のない指導者としての地位をも固めさせることになった。ほとんどの第一世代の緑の党員とは異なり、彼だけが数多くの塹壕戦と党内論争を生き延び、そして遂に緑の党を自らのアイディアに基づいて左翼のリベラル政党へと転換することのできるポジションについたのだ（途中一部略）」³⁰⁾。彼とはもちろん、ヨシュカ・フィッシャー、フランクフルトのラディカルな都市型新左翼「スポンチ」の出身者であり、その「愛用のスニーカーと持ち前のウイット」で若い緑の党のイメージ形成に貢献する一方で、マキャベリストを自認し、ヘッセン州の「赤-緑（SPD-緑の党）」連合政権では初めて環境大臣に就任したあのフィッシャーである。

28) R. Schmitt-Beck, "Wählerpotenziale," S.204. 補足しておく、時折話題となる（後述）いわゆる「黒（CDU/CSU）-緑」連合は、西部ドイツの「他政党に近いシンパ」層の若干部分（17%）で支持されているのみであり、同盟90・緑の党にとっては支持者の理解を「得にくい」選択となっている。そのことは潜在的投票者の「隣接政党」認識からも確認される。西部ドイツについては言えば、同盟90・緑の党を第一選好とする者のなかで、第二選好をSPDとする者が73%であるのに対して、CDUとするものは13%にすぎない（東部でもそれぞれ55%、9%）。また逆に同党を第2選好とするものの中でSPDを第一選好とするものは83%、CDUは9%（同じくそれぞれ68%、7%）。いずれにせよ有権者の選好から言ってSPDが同盟90・緑の党にとって「最も近い隣人」であることは間違いない。A. a. O., S.198.

29) Thomas Poguntke, "Party Activists versus Voters: Are the German Greens Losing Touch with the Electorate?," in Wolfgang Rüdiger, ed., *Green Politics*, vol. 1, 1990, Edinburgh, pp.34-35.

30) H. G. Betz, *op. cit.*, pp.211-212. なおフィッシャーの党内的な地位に関して、91年のノイミュンスター大会の段階で既に実質的な最有力者であったという指摘もある。後述するように同大会の党代表選出においては、フィッシャーの立場に近い有名人候補者が敗北した。しかしその結果皮肉なことに「影響力のあるライバルが党首脳部に不在となり、フィッシャーが無競争で大きな発言権を獲得することになった」というのである。"Mühselige Wurstelei," in *Der Spiegel*, 6. Mai 1991, S.19-20.

そう、結局激しい党内論争を、そして党内に蔓延する「有名人嫌悪」³¹⁾の雰囲気の中を生き残ったのは彼だけだったのである。小野氏は緑の党内論争を分析した論文において、党内の諸潮流を①エコロジー的自由主義（党内で「右の極を形成し、市場原理と代議制民主主義を信頼し、左翼に限定されない広範な市民層との連携を求める」）、②現実主義（ラディカルな「改革主義」を提唱し、赤－緑連合を通じた改革政策の実現を求める）、③原理主義（「エコロジー的で反資本主義的な展望」を抱き、新しい社会運動を基盤とした「対抗権力」の形成を求める）、④エコロジー的社会主義（「共産主義者同盟」などの影響下にあり、議会外抵抗運動と労働運動との結合を求める）の4つに分類し、それぞれ代表的な人物を挙げていた³²⁾。議会内活動の評価を基準にすれば、前2者が広い意味での「現実派（右派）」、後2者が同じく「原理派（左派）」ということになるのだが、小野氏が例示していた「原理派の指導者」は今や一人も残っていない³³⁾。東の「反党分子」から「緑の原理的エコロジスト」へと華麗な転身を果たし、初期の理論的指導者の一人とみなされていたルドルフ・バーロは「エコロジストの筋を通して」（原理的な動物実験の全面禁止を譲らず）早々に（85年）党を去っていた。「赤いハンブルク」の代表的指導者であったトマス・エバマン（87年総選挙後の議員団代表の一人）、ライナー・トラムベスト（82年～87年に党代表の一人）の両名は、「壁崩壊」の直後に他の社会主義者らと共に、新たな左翼の再結集を求めて去っていった。そして最後に残っていた「原理主義派の大物」、ユタ・デイトフルト（84年～88年に党代表の一人）は91年、ノイミュンスター大会（後述）を最後に、今一度初心に戻って「（エコロジー的左翼の）議会外運動の再起」を計るべく党を捨てた。徹底したエコロジスト、パシフィストで「スター」だったペトラ・ケリー（最初の党代表の一人、また欧州議会選挙、連邦議会選挙でも筆頭候補で、文字通り党の「顔」だった）は、すでにこの世にない³⁴⁾。「原理派」だけではない。フィッシャーと並ぶ「現実主義派」

31) 例えば以下のような指摘を参照。「ペトラ・ケリー、オットー・シリー、ヨシュカ・フィッシャー、ハーゼンクレーヴァー（「エコロジー的自由主義派」の指導的人物）といった議会の『スター』達は、初期における活動家達からの集中的な不信の焦点となった。」特にフィッシャーとシリーの場合は、「彼等がシステム内での権力政治に熱心であるという理由で信頼されていなかった」のだという。E. Gene Flankland/Donald Schoonmaker, *Between Protest and Power*, Westview Press, 1992, p.113. 注45)も参照。ただしこうした「有名人嫌い」は、「不信の文化」という意味では「病理」であるが、「寡頭制支配批判」ないし「エリート主義批判」という「新しい政党」にとつての「生理」の側面も有している。この点については筆者の別稿参照。丸山「オルタナティブ政党」, 135-136頁。

32) 小野耕二「緑の党」の党内論争と『緑の出発八八』の形成」（『名古屋大学法政論集』, 第155号）, 1994年, 16-17頁。

33) はっきりと跡づけることができる指導者レベルの動向について概観した。ただしもちろんこうした趨勢の背景には、一般党員のレベルでも同種の変動があったのだと考えられる。事実としてははっきりしているのは、①極端に薄い党員基盤（83年で2万5千人ほど、80年代の半ば以降は4万人程度で停滞）のままで、地方・州・連邦・欧州各議会のすべてに華々しく進出したために、めぼしい活動的な党員の多くが議会「内」に吸収されてしまい、「底辺民主主義のレトリックにもかかわらず、選挙－専門政党へ」と変貌していったこと、②その少ない党員の中で党員の「入れ替わり」が急だったこと（具体的な数字が分かっている例としてフライブルクの同党支部では、1983年から85年にかけて210人の党員に139人が新しく加わる一方で86人が離れていったという）、の2点である。党員の「世代交替」に関してキツェルトは、独自の聞き取り調査をもとに「プラグマティックな新メンバー」が「古参のイデオログや（様々な運動の）ロビイスト」と衝突する過程として分析している。H. Kitschelt, "Organization and Strategy of Belgian and West Germany Ecology Parties," in *Comparative Politics*, vol. 20, No. 2, 1988, pp. 132-140. また①の引用部分については以下の文献参照。E. G. Flankland/D. Schoonmaker, *op. cit.*, p.114.

34) 同じく最初のスターの一人だった「緑の将軍」バステイアン（元戦車師団長、核戦略批判から緑の党の連邦議会議員に転じた）と共にこの世を去った（警察発表は「無理心中」）。ただしラディカルな原理派のスターであったケリーは、87年、党の分裂の危機を回避するために「緑の出発派」（後述）の旗上げ文書に署名をして注目されていた。

の指導者だったオットー・シリー（フィッシャーとは異なり、緑の党内にあっては異色の「ネクタイ・スーツ派」で、弁護士の経歴を生かし、数々の汚職事件の追求を通じて「議会内の顔」の役割を果たしてきた）は、「党改革を待ち切れずに（党の原理主義者達に愛想をつかして）」SPDに移っていた（89年）³⁵⁾。

そして84年、生き残ったフィッシャーはケルスティン・ミュラー（女性）と共に、議員団の共同代表に選出された。共に党改革を成し遂げた「緑の出発派」（いわゆる中間派）³⁶⁾の指導者であるアンティエ・フォルマーは、連邦議会副議長の要職に就いた。そして「あの」ルードガー・フォルマー（88年に原理派内の独立派・非教条派の左翼グループとして結成された「左翼フォーラム」の指導者の一人で、91年のノイミュンスター大会で「党代表」の一人に選出されていた）も、党代表を辞して今やその議員団の一員となった。

大勢として「議会主義」論争（「連合問題」論争を含む）³⁷⁾の決着はついたのだ。反議会的な立場はもちろん、「議会外運動のメガホンないし演壇としてのみ議会を利用する立場」も退けられた。議会内において「原理的反対の野党、体制批判の党」に自己限定し、あらゆる連合を拒絶する道も（少なくとも公式には）閉ざされた。もちろん右派と左派、あるいはより綱領に忠実な、その意味で原則的、理想主義的な立場と、より現実主義的で妥協的な（柔軟な）立場との間に「政策・戦略論争（近年ではとりわけ安全保障問題をめぐって）」は残っている（しかも相対的には、より激しいそれが）。しかしいずれにせよ彼等は、94年の選挙綱領で公約した通り³⁸⁾、「真剣な改良政治が実現する見込みがあれば、全力で政権連合に参加する覚悟ができてい」るのであり、「SPDとの連合に可能性を見出ししている」のである。そのために同盟90・緑の党が議会内で（「諸政党の間で」）占めようとしているポジションは、先のミュラーによれば、「左翼エコロジー的な改良政党」の、すなわち「社会的な和解をエコロジー的な変革の展望と結び付けるような」党であり、「市民権とより穏健な移民者政策を擁護するような」党である³⁹⁾。

では今少し針を戻して、同党のドイツ統一後の変容過程を検討しよう⁴⁰⁾。

- 35) 同時期にテア・ボック（「女性」で「市民運動」経験のある体操教師として「赤いハンブルク」における市民派の「顔」だった）もSPDへと移っている。結果的にはシリーともども「早過ぎた決別」だったのかもしれない。
- 36) 同派は元々「現実派」、「原理派」の激しい対立を調停する（前者の過度の現実主義、後者の過度の原則主義を批判して、「エコロジーと人権の党」としての新しい出発を訴えた）ために結成された「中間派」であるが、結局フィッシャーを中心とする「現実派」と提携して後の「党改革」（合理化、現実化の方向で）を促進する役割を果たすことになった。同派に関しては先の小野氏の研究に詳しい。小野、前掲論文、21-27頁。
- 37) 筆者の別稿も参照。丸山「オルタナティブ政党」、114-116頁。なお「どの党と組むか」という意味での「連合問題」については、多数派である「エコ社会派」と「エコ自由派」の間に論争の火種が残されている。4章参照。
- 38) Bündnis90/Die Grünen, *Programm zur Bundestagswahl 1994*, S.6. なおこのような選挙綱領前文で「SPDとの連合政権の可能性」を明示したのは今回が初めてである。ちなみに前文末尾の有権者への呼びかけを90年の選挙綱領と比べてみよう。「支配している政府の政策に対する本当の対案を望む者は、緑の党を強くするべし」（90年）。「赤-緑を望むものは緑の党に投票するべし」（94年）。極めて明瞭なメッセージである。Die Grünen, *Das Programm zur 1. gesamtdeutschen Wahl 1990*, S.7.
- 39) なお引用部分の前には次の文章がある。「同盟緑の党（ママ）は、右と左の彼岸に自らの立場を定めることはできない。」もちろん同党が「客観的に」（政党間の相関関係において、また有権者の認知においても）「左」の政党であることは、既に研究者にとっては常識であった。しかし、「右でも左でもない、前だ」というメッセージに共感して同党の研究をはじめた者にとってはやはり感慨深いものがある。Kerstin Müller, "Bündnisgrüne Vagabunden?" in Bündnis90/Die Grünen, *Standort Bestimmung Bündnisgrüner Politik*, 1995.
- 40) 緑の党が一定の合理化、現実化を余儀なくされた組織政治上の諸要因に関しては筆者自身既に別稿で検討した。また80年代の党内論争については先の小野氏の論稿に詳しい。従って本稿では、ドイツ統一後の、また直接的な転換の契機のみを概観する。

(2) 90年総選挙の大敗と同盟90・緑の党の誕生

大敗のショック

「8.3%から4.8%（西側のみ）へと後退し、5%のハードル越えに失敗した敗者たちには苦痛と辛さと諦めがあり、希望はほとんどない。選挙民のほとんど半数がSPD, FDP, CDU/CSUに投票を変更するか、あるいはただ棄権したのだ。その結果、議員とその協力者の多くが失業保険の受給者となった。そのショックを克服したものはほとんど誰もいない。打ちめされた人々は途方にくれてその原因を求め、互いに罪を着せ合い、時には自らを責めた。・・・（次の）党大会で構造改革が失敗すれば、連邦規模で他の諸政党へ、あるいは私生活への逃避が、さもなくば新しい政党が創立されるだろう。」（シュピーゲルから）⁴¹⁾

ドイツ統一後初めての総選挙の結果、西の緑の党が議会から姿を消した直後の様子である。しかし結局はこの大敗こそが、緑の党の自己破壊的な党内紛争を抑制し、今一度最低限の合意形成を迫ることで、緑の党の最大の危機（決定的な分裂、決定的なイモビリズム、いずれにせよ少なくとも連邦レベルでの存亡の危機）を救うことになった。ベッツに言わせれば、「それは緑の党をしてラディカルな構造改革なくして生き残ることはできないということに納得させるのに必要なショック療法だった」ということになる⁴²⁾。彼は90年総選挙における緑の党の大敗の要因として、①不幸な諸環境（統一問題の急浮上が、ただでさえエコロジー的な変革の展望を暗くしたことに加えて、SPDの首相候補者が緑の党の立場に近いラフォンテーヌだったこと）、②戦術的な誤り（単独で選挙戦に望んだこと。東西の両党を合計すれば全国で5.1%の得票率だった）、③戦略的な誤り（東独社会主義の自己改革に過剰な期待を抱く一方で、統一に批判的な立場を取ったことで、統一を評価ないし甘受するシンパ層の離反を招いたこと）、そして④党内対立の激化（内部的な闘争や相次ぐ脱党騒ぎが「組織的に無責任で、自己陶醉にふける、緩慢に解体しつつある政党」という印象を有権者に与えたこと）などの点を挙げている⁴³⁾。またポグントケは、⑤非効率で風通しの悪い（諸機関の過度の分離に起因する）「緑の党の組織構造の特性」（従って情勢の変動への機敏な、また首尾一貫した政治的対応が阻害される）を内部的な要因として指摘している⁴⁴⁾。この最後の点は、ベッツの③の一因としての、また④の結果としての性格を同時に有していると考えられる。

①については外部的な要因であり、いかんともしがたい（というか、2章で言及したように、前者の条件は長期的にはむしろ「好転する」可能性が高い）。しかし②から⑤については、特に②は明確な時間制限（次の選挙までの4年間）が課された、そして④と⑤は「純粋な」党内問題であり、全国政党として今一度躍進するために、早急な対応が迫られることになった。②についての「結論は」出ていた。西の緑の党にとっては、連邦議会への確実な「復帰」のために、東の同盟90にとってはまさに連邦議会での「生き残り」（5%条項が全国単位で適用された場合に彼等が単独で生き残る可能性は事実上0に等しかった）のために必要だったからである。問題はその時期と「手法」、政策合意のあり方（現実には統一がなった「今」となっては、③の問題はこの点にかかわる）だった。④についての主要な対立点は、①一定の合理化、効率化の方向で党組織の構造改革を実現することの是非、つまり⑤の問題への対応のあり方、②党

41) "Dagwert vorm Fleischerladen," in *Der Spiegel*, 10. Dezember 1990, S.28-29. ちなみにこのタイトルは、デイトフルトに「墓掘人」と罵倒されたフィッシャーが、彼女を（肉屋 Fleischerladen の前の）「よく吠える自分の飼い犬のようだ」と評したというエピソードからつけられている。同記事には選挙の敗因をめぐる激しい論争の一端が紹介されている。

42) H. G. Betz, *op. cit.*, p.206.

43) *Idid.*, pp.205-206.

44) T. Poguntke, *Alternative Politics*, *op. cit.*, p.167.

の基本的なアイデンティティをめぐる路線対立、端的には「エコロジー的・社会的な改良政党」なのか、それとも「エコロジー的・社会主義的（反資本主義、反システムの）なラディカルズムの党（抵抗政党）」なのかをめぐる対立、③提携政党をめぐる対立、端的にはSPDとの「赤一緑連合路線」を明確に採用するか否か（ただし最右派ないしリベラル派はFDPはもちろんCDUとの連合を容認し、また最左派ないし原理派はむしろPDSとの提携を展望していた）の3点であった。

結局党改革に関しては、「次の大会」、つまりノイミュンスター党大会（91年）が最初の決定的な一歩を画し、同盟90との合同（93年）がその一歩をさらに確実なものとするようになった。

ノイミュンスター党大会

既に言及したように、同大会は、フィッシャーを中心とする「現実派」とアンティエ・フォルマーを中心とする「出発派（中間派）」が「党改革派」としてスクラムを組み、それにロードガー・フォルマー（「左翼フォーラム」）を中心とする左派（相対的に言えば「現状維持」派）が対峙し、さらに原理派の極にユタ・デイトフルトとその支持者たち（同じく「初心に帰れ」派）が陣取って「最後の抵抗」を試みるという対立図式の中で進行した。多くの報道が、注目したのは、大会そのものの「騒々しさ」と共に、代表選出の「番狂わせ」だった。「改革派」に都合のよい「穏健な有名人のトロイカ」（中間派の顔であるアンティエ・フォルマー、同じく現実派の顔であるフーベルト・クライナート、そして「東の緑」の顔であるヴェラ・ヴォレンベルガー）は否定され⁴⁵⁾、左派のフォルマーと、西側では無名に近かったクリスティーン・ヴァイスケの二人が選出されたのだ。また改革派の構造改革案の目玉の一つであった「党執行部職と、議員職の兼任禁止規則の解除」も実現しなかった（その結果ヴォレンベルガーの当選はそもそも規約上否定された）。

しかし一方で確実に改革派は前進していた。先の整理にしたがって確認しておこう。まず「党の組織改革」⁴⁶⁾ に関しては、①党執行部のスリム化（特に代表が3人制から2人制へ）と執行部メンバーのローテーション原則の廃止、②常設の議決・調整機関（連邦党と議員団、また連邦一州、各州間の）である連邦中央委員会の各州（代表）評議会（Landerrat）への改組（ここで特に重要なのは、執行部メンバーと州選出の代表に、連邦及び州の議員の一部が加わった点）が注目される。実は②の改革によって、厳密な意味での「党の役職と議員職の兼任禁止」（「底辺民主主義という聖なる原理の一部」⁴⁷⁾ は崩されたのであり、これが党（執行部）と議員団との意思疎通を促進することが期待された。また「基本的な党のアイデンティティ」につ

45) 東西の緑の党は、既に90年総選挙の直後に統一されていた。なおフィッシャーの盟友であるクライナートの敗因は、「彼が有名人であったこと」に加えて、「多くの人々がフィッシャーの喜ぶ顔を見たくなかった」からだという。“Mühselige Wurstelei,” a. a. O., S. 20.

46) 党組織に関して、また構造改革に関して詳しくは筆者の別稿を参照。丸山「オルタナティブ政党」, 119-142頁。なお念のため補足しておくが、ノイミュンスター以後も緑の党が依然として「最も参加的、民主的、開かれた」政党であることには変わりがない。「緑の党はいまだに役職の集中のない、集団的な指導部を持つ、明白に参加的でエリート挑戦的な党内政治文化を持つ、女性に特別な拒否権を認める、連邦党大会への動議提出に対する草の根の権利を認める唯一の政党である」（ポグントケ）。さらに、「最も充実した女性へのクォータ制度が機能している」点、また90年代以降の制度改革として、党内に「組織内結社としての『市民運動』（後述）を有している」点（党規約第9条3項）、「フリーの協力者」（Freie Mitarbeiter）を制度化している点（党規約第7条）を加えてもいい。このフリーな活動家は、他の党の党籍を維持することも可能であり、完全な情報取得の権利、党内の政治的討議に参加する権利を有し、さらには議員候補者となることも許される（ただし党の役職につく、あるいは議決権を行使することはできない）。T. Poguntke, *op. cit.*, p. 169. 規約については93年度版及び96年度版を参照している。Bündnis90/Die Grünen, *Satzung des Bundesverbandes*.

47) T. Poguntke, *op. cit.*, p. 167.

いては、「改革派」の主張通り「エコロジー的な改良政党」ないし「エコロジー的ヒューマニズム」の党であることが宣言され、「提携政党」に関しても、「SPDに対する我々の政治的プロフィールの明確化」を条件として「赤-緑連合」の模索が明言された⁴⁸⁾。

そして冒頭に触れたデイトフルトの離党である。こうした決着は彼女の許容範囲を越えていたのだ（そしておそらくはノイミュンスター以後の緑の党にとって彼女の存在も）。だから彼女は「終わってしまった。もはや緑の党は私達の党ではない⁴⁹⁾」と言い残し、「残ろうとする者を哀れみながら」出ていったのであり、希望を持って残る者は「彼女とその友人とは、緑の党を反資本主義的な道具として悪用するいかなる機会をも失った」として、また「決定的なのはルードガー・フォルマーを中心とする左派及びほとんどすべての緑の人々が、デイトフルトなる人物の原理主義的な馬鹿げたおしゃべり（運動神話、黙示録的な終末を伴う空虚な脅迫、自己陶醉的なラディカリズム）から切り離されたことにある⁵⁰⁾」として拍手で見送ったのである。「改革派」の展望が正しかったこと、少なくとも選挙政党として正しかったことはすぐに証明されることになった。同年のハンブルク州議会選挙において、執行部が現実派に交替したばかりの「緑のリスト」（GAL）が7.2%（90年の連邦議会選挙では5.0%、87年の州議会選挙では7.0%）と躍進したのに対し、「デイトフルトの原理主義的な見解の支持者達が形成したオルタナティブリスト（AL）」は、PDSの「左翼リスト」ともども、0.5%（合計しても1%）という極小政党の地位に甘んじたのである⁵¹⁾。

なおこの大会では、「共通の政治的展望と共通の組織的枠組を発展させるために、連邦執行部が（東の）諸市民運動及び連邦議会グループの同盟90・緑の党と対話を進めること」、そしてとりわけ統一リスト作成の作業は「次の連邦議会選挙に間に合わせる必要があること」が決議されていた（ノイミュンスター宣言）。

同盟90・緑の党の誕生

「両参加者が合意しなければならない。その中で双方が同等の権利を有するような手続きが選ばなければならない。ボンの合併政治にならった統一は当然禁止される。」（同盟90・緑の党『政治的基本原則』前置き⁵²⁾）

これは、同盟90・緑の党が自らの統一交渉過程に当って掲げた基本理念である。両党は「底辺の決定」（両党の党員投票で、緑の党の91%、同盟90の85%が賛成票を投じた）という手続きを経て、1993年5月、ライプツィヒの臨時党大会において正式に統一された。全国政党とし

48) Die Grünen, *Erklärung von Neumünster*, 1991.

49) Gunter Hormann, "Ein neuer Start im Rückwärtsgang," in *Die Zeit*, 3. Mai 1991, S.2. ちなみにこの記事のタイトルは「後ろ向きの新しい出発」である。同大会を批判的に報じた記事の典型的な一例である。

50) Udo Knapp, "Nerven behalten," in *die tageszeitung*, 30. April 1991, S.10. クナップはフィッシャー同様「ノイミュンスター大会の黒幕」と評される現実派の指導者の一人である。彼は党代表選挙の結果には失望を示しつつも、いずれにせよ「ノイミュンスター後の緑の党には以前よりもより良い未来へのチャンスがある」として、「平静さを保つ（タイトル）」よう呼びかけていた。

51) E.G.Frankland/D.Schoonmaker, *op. cit.*, p.226. なお既に紹介したように、ハンブルクでは続く州議会選挙（93年、97年）において緑の党の最高記録を更新することになる（13.5%、13.9%）。

52) Bündnis90/Die Grünen, *Politische Grundsätze*, 1993, S.6. この *Grundsätze* の中には、「政治的序言 Politisches Vorwort」と「基本合意 Grundkonzeptions」が収められている。ここで引用してある「前置き Einleitung」は冊子冒頭に置かれた全体の「前置き」である。なお最後の段落に引用されている「前文 Prämbel」は、「基本合意」の冒頭に置かれたものである。

念のため補足しておく。「同盟90」（90年同盟）は、文字通り1990年に、当初は東独の人民議会選挙向けの「選挙同盟」として発足した市民運動の連合体である。加わった団体は「新フォーラム」（一部の「運動重視派」は不参加）、「民主主義を今」、「平和と人権のためのイニシアティブ」である。

での同盟90・緑の党の誕生である。果たして先のような基本理念は生かされたのであろうか？

交渉のテーブルについて段階（92年）で、両党の勢力には著しい不均衡が存在した。緑の党がおおよそ3万8千人（内東の緑の党は1200人ほど）の党員を擁していたのに対して、同盟90はわずかに2700人を数える（西には100人ほど）のみだった。「民主的に」多数決の原理を、あるいは純粋に「比例代表の原理」を採用したとしても、実質的には西の緑の党が東の同盟90を吸収する形に、つまり東のアイデンティティが失われる結果になってしまう。だからといって東側の大幅な過剰代表を許容することには、当然のことながら西側から批判の声が上がった。それでも「ボンの吸収合併劇（ドイツ統一）」を批判する彼等、とりわけ西の緑の党は、おそらくは最大限の忍耐と配慮を払ったのである。彼等には「2つの独立した組織が1つの政党を形成する際の民主主義」の実践を、端的には「党員数によれば大きな組織である緑の党がより小さな組織に指図することはない」（同「前置き」）と宣言する資格がありそうである⁵³⁾。

彼等の苦心、努力の跡は例えば次のような点に見い出される⁵⁴⁾。①合計750人の党大会代議員の内150人を東部諸州の代表に割り当てた点、②連邦執行部ポストの一定数を、とりわけ党代表の1人は東の出身者に割り当てた点、③州代表評議会（前出）において、東側に留保的な（一時効力の停止を意味する）拒否権を与えた点、④旧同盟90のメンバーに「党内結社『市民運動』“Bürgerbewegung”を結成する権利」（ただし「同組織はすべての党員に開かれている」）が保証された点（党内党ならぬ「党内運動」の公認であり、東の利益ないしアイデンティティ擁護の焦点になりうる組織を組み入れたのである）、⑤「緑の運動にはよくある象徴主義的な政治的解決策として」、党名においては「同盟90」が優先された点（ただし略称は依然として「緑」のままであるが）などである。もちろん東側への配慮の多くは過渡的な措置であり、「長期的には規模の政治は新しい政党にも広がる可能性が高い」と言えよう⁵⁵⁾。とは言っても、この展望がどの程度正しいかは、結局のところ今後の東側の主体的な努力（端的には党員、活動家のリクルート能力、また選挙での支持調達能力）次第でもあるのだ。

東のパートナーとの統合は、「統一ドイツの緑の党をイデオロギー的により穏健で、政治的にはよりプラグマティックにさせる」⁵⁶⁾と予測されていた。何故なら彼等は「草の根民主主義・対・議会制民主主義をめぐるイデオロギー的な論争には無関心だった」⁵⁷⁾のであり、何より「西の緑の党に蔓延している『政治幼稚園』的な雰囲気（反システムのレトリックやラディカルなお上品さ、呆れるほどの党内論争の激しさ）」⁵⁸⁾にうんざりしていたのであるから。また彼等は一方で西の緑の人々に比べて「大量失業や利用可能な住宅供給の不足といった社会問題をより強調した」のだが、他方で例えば西の緑の「ジェンダーの平等やフェミニストの問題提起に関する主張」についてはあまりに「極端である」と感じていた⁵⁹⁾。彼等は「抽象的な社会・

53) 以前の論文で筆者は、「緑の党の（オルタナティブな）組織・行動理念」の真価が問われるポイントの一つとして、この統一交渉の行方に注目していた。丸山「オルタナティブ政党」, 145-146頁。

54) 以下の記述については次の文献参照。T. Poguntke/R. Schmitt-Beck, "Bündnis90/Die Grünen," pp. 94-99. H.G. Betz, *op. cit.*, pp. 206-208. なお前述した連邦議会の会派代表（フィッシャーとミュラー）は、2人とも西側選出（それぞれヘッセン、ノルトライン・ヴェストファーレン）である。ただし院内幹事に東側選出（ザクセン）のヴェルナー・シュルツ（元「新フォーラム」の指導者の一人）で1990年から連邦議会議員）が入っている。

55) T. Poguntke/R. Schmitt-Beck, *op. cit.*, p. 98. 彼等はまた別の個所で、「東の利益を代表するがゆえに、またシュタージの過去への関心のゆえに」、質的にも東の党の独自性が残っていくであろうことを予測している。 *Idid.*, p. 96.

56) H.J. Veen/J. Hoffman, a. a. O., S. 162.

57) E.G. Flankland/D. Shoonmaker, *op. cit.*, p. 171.

58) H.G. Betz, *op. cit.*, p. 207.

経済システムのトータルな変革の夢」をではなく、まずもって「今ここでの生活条件（もちろん彼等の場合環境・人権問題を含むそれであるが）の改善」を求めていたのだ。そんなわけで西の緑の党においては、「左翼フォーラム」が「一層右寄りに引っ張られてしまうことを恐れて」東の隣人の流入を警戒したのに対し、「出発派」は逆に「『エコロジー的な市民権政党』への転換という自らのプロジェクトを後押ししてくれる援軍として」歓迎したのである⁶⁰⁾。

「我々緑の党と同盟90とは、両ドイツの反対派文化から生まれ、新しい国内的及びグローバルな諸挑戦の下で、共同の政治勢力として、我々の民主的な諸改革目標に向けて戦い、政治的な責任を引き受けるために同盟90・緑の党を結成した」（『基本合意』前文、ただし下線は筆者）⁶¹⁾。結局東の同盟90との統一は（既に完了していた東の緑の党との統一も含めて）、全体として先のノイミュンスター大会で示された党改革のトレンド（合理化、効率化、改良・責任政党化）を追認、強化し、党内の勢力バランスとしては「現実派（右派）」ないし「中間派」に重みを加えることとなった。そしてまた当然のことながら、具体的かつ緊急の政策課題として大量失業問題を始めとする「東西格差の是正」ないし「東西の連帯」という争点が急浮上することになる。「94年総選挙綱領前文」で「我々が目指す社会像」の筆頭に置かれたのは、「エコロジー的な社会」ではなく（2番目）、東西の「公正な負担調整」、「労働と所得の公平な分配」などをその中身とする「連帯ある社会」であった⁶²⁾。

そして「94年の決着」（第1節）が来る。統一ドイツの同盟90・緑の党は、「政治の改革と諸改革の政治」を求め、「社会的・エコロジー的な軌道修正を実現する」ために、「政権交代」を目指した⁶³⁾。この目標は94年の総選挙後には実現しなかった。では次の98年総選挙の後ではどうだろう？もちろん同党の「政権戦略」は、あくまでも「連合政権」のそれ、しかも現状では実質的に同党が「ジュニアパートナー」を務めるそれではしかありえない。そこで次章ではまず、政党システム全体の変容の観点から、とりわけその連合政治の力学との関係で、同盟90・緑の党の置かれている政治的ポジションを確認する。その上で最近の各党の政治的思惑も含めて同盟90・緑の党の政治的オプションを検討しよう。

59) *Idid.*, p.208.

60) T.Poguntke/R.Schmitt-Beck, *op. cit.*, p.97.

61) 注52) 参照。

62) Bündnis90 / Die Grünen, *Programm zur Bundestagswahl 1994*, S. 5. ちなみに以下「民主的な社会」、「多文化的で寛容な社会」、「解放された社会（男女の平等他）」、「平和な社会」と続く。ちなみに本文の冒頭部分（「経済、エコロジー、社会政策」）も、強引なドイツ統一の負の遺産に対する批判から説き起こされている。また先の「基本合意」の中で「社会的公平」という基本価値は、「人権（!）」、「エコロジー」、「民主主義」に続いて4番目に登場する。ただしその位置付けは、「エコロジー、人権、民主化、男女の平等化、非暴力」といった諸価値が「包括的に現実のものとなるための前提条件」という根本的なものである。「より公正な諸利益の調整は、西から東への機会の再配分と東から西への負担の再配分を必要としている」という。Bündnis90 / Die Grünen, *Politische Grundsätze*, 1983, S.29-30. 蛇足であるが、こうした姿勢は結局94年の総選挙では十分な得票結果に結び付かなかった。2章を参照。

63) Bündnis90 / Die Grünen, *Programm zur Bundestagsprogramm 1994*, S.4-5.

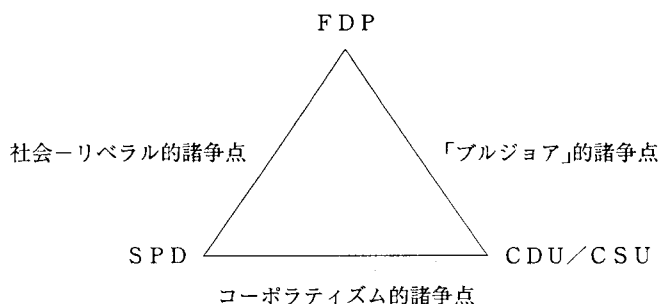
4. 連合政治の力学と同盟90・緑の党の政治的オプション

(1) ドイツ政党システムの変容⁶⁴⁾

緑の党参入以前 (1961～) の政党制

緑の党が連邦議会に進出 (83年) するまで、ドイツの政党システムは「安定したトライアングル3党制」(図1) によって運営されてきた。これは政党制類型として言えば、政党数が少なく、また政策・イデオロギー距離が近いという意味で典型的な「穏健多党制」であった。具体的には左右の大政党 (SPDとCDU/CSU) と、リベラルな小政党 (FDP) からなる3党制であり、政権運営はその3党のうちの2党が代わる代わる連合を組む形で行われてきた。左右の两大政党の勢力が伯仲していたために、この「連合ゲーム」においては、基本的にFDPが中間的な「かなめ」政党 (pivotal party) として有利な立場を享受してきた。ただし大連合の可能性が政策上、有権者の選好上、また連合戦略上 (小政党であるFDPの過大な要求に対する制裁として) 一定の正統性を有しており、現実にも試された (66年-69年) がゆえに、あらゆる組み合わせが可能な、従って「安定した」、「トライアングル型」の政党制だったわけである。

図1. トライアングル3党制



出典：Pappi, "The West German Party System," p.12. (一部修正)

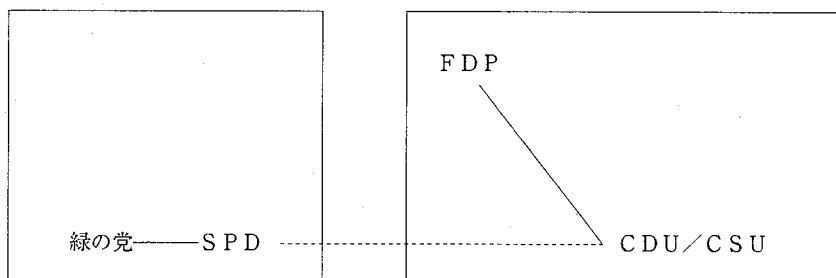
緑の党参入以後の政党制

この「3党制」カルテルに割って入ったのが緑の党である。緑の党の参入は、単に「3党制」から「4党制」への移行を意味するだけでなく、連合政治の力学にも重要な変化をもたらすことになった。ここで決定的なのは、①緑の党の参入とSPDの地盤低下に伴い、SPDとFDPとの組み合わせでは過半数を確保できなくなったために、FDPが事実上「かなめ政党」としての地位を、つまり「2股戦略」を取りうる戦略的なポジションを喪失したこと、そして②緑の党がそのラディカルな政治的立場 (「エコロジー指向」及び「左翼指向」において) ゆえに、また選挙民の選好 (SPDとだけ近接する) ゆえに、当面は「外側政党 (outer party)」

64) このテーマに関しては加藤秀治郎氏の先行業績が参考になる。とりわけ以下の文献参照。加藤秀治郎『戦後ドイツの政党制』(学陽書房, 1985年)。加藤秀治郎、楠精一郎『ドイツと日本の連合政治』(芦書房, 1992年)。筆者自身のもので、丸山「西独政党システムと『緑の党』(二)」(『名古屋大学法政論集』, 第124号, 1989年), 380-425頁。以下の記述は上記の文献及び下記の両文献を参考にしてまとめている。W. Kaltefleiter, a. a. o., S. 16-26. Franz Urban Pappi, "The West German Party System," in *West European Politics*, vol. 7, No.4, 1984, pp.11-25.

の位置につく（量的にのみならず、FDPとは異なり「位置」的にも連合ゲームにおける中間的な「かなめ」政党にはなりえない）ことが明らかだったことである。この結果、トライアングル政党制は崩壊し、右側に「保守（黒）－リベラル（黄）」の政権ブロックが、左側に「赤－緑」の野党ブロックが位置するという「2陣営4党制」（図2）が成立した⁶⁵。以降現在に至るまで連邦レベルでは、一貫して「保守－リベラル」政権（コール政権）が継続することとなる。

図2. 「2陣営4党制」



統一ドイツの政党制

現在ドイツの政党制は、左の極に「民主社会党PDS（社会主義統一党の後継政党）」が加わり5党制となっている。さらに将来の政党制を展望するに当たって留意すべき点は、以下のようのものであろう。①右側に「保守－リベラル」ブロックが位置するという構図自体は今のところ安定しているものの、FDPが長期的な衰退傾向にあり（既に多くの州で5%の壁に阻まれ姿を消している）、連邦レベルにおいても今後の存続が危ぶまれている点、②PDSについても、連邦レベルでの存続が不確実（引き続き「直接議席」を確保できるのか、さもなくば全国で5%を越える得票率を獲得できるのか）であり、また存続する場合は当面連合ゲームにおける「外側政党」（しかも当面すべての政党からパートナーの資格を拒否される）の位置につくしかないという点、そして③前述したように、同盟90・緑の党が明確に政権参加の意志、また「改良政党」指向を表明したことで、同党と既存3党との政策・イデオロギー距離が縮まった点、④ドイツでは以前から州レベルの連合政治のあり方が連邦レベルのそれを占うものとして注目されてきたが、上述のような新しい情勢に対応して既に様々な連合パターン（「赤－緑」連合、FDPを含むいわゆる「信号連合」から大連合、少数単独政権まで）が現実的に試されてきた点などが挙げられよう。

統一後のドイツの政党制を、その展望も含めてどのように特徴づければいいのかの点で、ヴァルターの見通しは明瞭である⁶⁶。「SPDこそが長らくFDPがそうだったよう

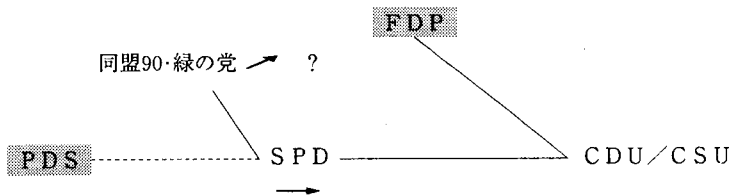
65) 特に80年代の連邦、州議会選挙の分析において、「陣営選挙」という用語がよく使われた。これは本文でも述べたとおり、「ブルジョア陣営と左翼陣営」、「与党連合と赤緑連合」のように、4党が2党ずつ、2つの陣営に別れて向き合うという構図を前提としている。さらに選挙結果の変動、つまり票の移動が多くの場合、「陣営間」ではなく「各陣営内（SPDと緑の党、CDUとFDPの間）」で起こったことが注目された。またこの言葉は、元々保守の側から「SPDと緑の党を左翼ブロックとして固定化することで、特に中間層のSPD離れを促すため」に政治的に考案され、広められたという性格を有している。

66) Franz Walter, "Die SPD nach der deutschen Vereinigung," in *Zeitschrift für Parlamentsfragen*, 26. Jg., Heft 1, 1995, S. 112.

に、ドイツにおける政権政党中の政権政党」となる公算が高いというのである。理由は簡単である。SPDの左に「緑の党とPDS」が、右に「FDPとCDU/CSU」が位置することで、同党が最も豊富な「連合オプション」を有することになるからである。実際に80年代の半ば以降、SPDは基本的に「中道方向への位置取りのやり直し」によって連合形成の主導権を握る戦略を、従って政権パートナーの選択においては「最大限のフレキシビリティを維持する」戦略を採用しているという⁶⁷⁾。これは結局選択を明示しないということだが、87年総選挙の時のように（あまり見込みのない）単独政権構想を表向き提示する場合も、実質的に同様の効力を発揮すると見ていいだろう。

つまりはSPDこそが、連合ゲームにおける新しい中間的な「かなめ」政党になるということであろう。しかもSPDが大政党であるという点で、また「SPDをまたぐような」左右両極の組み合わせが少なくとも合理的な選択としてはありえないという意味では、かつてない強大な「政権政党」となるはずである。こうした展望に従うならば、将来のドイツの政党制は「SPDが中央に位置する3～5党制」（図3）ということになるのであろうか？実はこの点では、同盟90・緑の党の今後のポジショニング、政権戦略が鍵となってくる。何故なら連合ゲーム上は、「緑のFDP」が新たな「2股戦略」（「赤-緑」かさもなくば「赤-黒」）を採用するというもう一つの道が存在するからである⁶⁸⁾。

図3. 新3～5党制？



(2) 同盟90・緑の党の政治的オプション

「コール首相、緑の党ににじり寄る」⁶⁹⁾。94年総選挙の直後、日本でもこうした見出しが紙面を賑わせた。「コール首相が長年の敵だった環境政党の『緑の党』に『価値観を共有できる』と秋波を送った」というのである。「秋波」発言の中身は、「孫子の世代に引き継ぐ環境を汚染する権利はないという主張には共感する」というもの、また「緑の党を普通の政治勢力として扱うのに何も問題はないし、我々と敵対関係にあるとは思えない」というものであった。

こうしたコール発言の背景を同記事では、「連立パートナーの低迷が深まる中で、一致でき

67) Stephen Padgett / William Paterson, "Germany: Stagnation of the Left," in Perry Anderson / Patrick Camiller, eds., *Mapping the West European Left*, Verso, 1994, P.115. また関連する文献として、加藤『ドイツと日本の連合政治』、前掲書、92頁。なお、SPDの「戦略的な非決定」の一因は、もちろん緑の党の側の「非決定」にある（ただし、こちらは戦略的というより党内対立に起因するやむを得ざるそれだが）。

68) ベッツは、「緑のFDPへ?」、また「赤-緑から黒-緑へ?」という問題設定で明示的にこの可能性を論じている。H. G. Betz, *op. cit.*, pp.211-218.

69) 萩谷順「再編独も?」（『朝日新聞』、1994年12月30日）。また95年5月17日付けの同新聞にも、州議会選挙におけるFDPの消滅、緑の党の躍進という流れの中で「CDU内に黒-緑連合を真剣に考慮すべきだ」という声が浮上してきている」という観測を伝える記事が掲載されている。

る政治課題では緑の党を『部分連立』に引きずり込み、政権安定をはかる戦略』であると分析していた。もう少し長期的な政権戦略との関係で言えば、端的には「FDPが欠ける場合の保険をかけた」ということであり、連合ゲーム上SPDにのみ複数の連合オプションを与えることを警戒しての「牽制球」といったところであろう（前節参照）。

ただしこうした保守政党の同盟90・緑の党への接近は、純然たるリップサービスというわけではない。先に言及したアンティエ・フォルマーの副議長就任は、そもそも「SPDの激しい抵抗」を排して、CDUの支持で実現したものである。また近年の州議会選挙において、依然としてFDPの衰退傾向が止まっていない（94年以降で、FDPが5%を下回り、緑の党が残った州として、94年のバイエルン、ザールラント、ザクセン・アンハルト、95年のプレーメン、ノルトライン・ヴェストファーレンの各州が挙げられる）以上、「大連合」とともに「黒-緑」のシナリオに関しても真剣に考慮せざるをえなくなりつつあると言えるだろう。

同盟90・緑の党の政権戦略は、現在でも公式には94年総選挙時の公約通り「赤-緑」連合、それも当面「真っ赤」なPDSは排除した「SPDとだけ組む」それである⁷⁰⁾。ただし最近こちらでも、党内から「黒-緑連合」発言が飛び出して問題になった。バーデン・ヴュルテンベルク州選出の連邦議会議員オスヴァルト・メッツガーが、インタビューの中で「未来の大プロジェクトとして」黒-緑連合に言及し、その発言に対して即座に党代表が警告を発したというのである⁷¹⁾。先に言及したように、元々党内には保守勢力との提携も含めて現実的なエコロジー政策の実現を目指す「エコ・リベラル派」（その拠点がバーデン・ヴュルテンベルク州）が存在していた。従って議会主義論争の決着が付き、いかなる「政権戦略」かが議論の焦点になるに連れて、今後ますます党内で「緑のFDP（つまり「黒-緑」を1つのオプションとして公認する）」を目指す声が公然化する可能性は高いと言えよう⁷²⁾。

ただし目下のところ「黒-緑」連合という選択には、党内の合意調達上の困難だけではなく、「支持者の大量離反」という重大な政治的リスクがつきまとう。何故なら2章で検討したように、同盟90・緑の党の支持者にとってはSPDこそが最も近い隣人であり、「赤-緑」連合への期待が群を抜いて高いからである。実際に94年のザクセン州議会選挙においては事前に「クルト・ビーデンコップとの黒-緑連合の可能性が」話題となったが、同選挙で同盟90・緑の党は敗れた（90年の5.6%から4.1%へと失速し、議会から姿を消した）。「こうした議論は非公式のものであったにもかかわらず、それでも同党が再び州議会に戻るチャンスにダメージを与えた」⁷³⁾というのである。保守の側の大幅な政策転換により「黒-緑でこそ実現できるような」政策課題が、それも例えば同盟90・緑の党の看板である環境政策の分野で提示されでもしない

70) ARDニュース (tagesschau), 1997年1月8日及び10日分による。同ニュースのアドレスは以下の通り（もちろん過去のニュースも検索できる）。<http://www.tagesschau.de> なお、同盟90・緑の党がことさらにPDSの排除を明言する背景には、党内の動揺を静め、「これ以上のCDUへの移籍」を阻止する意図があるとされている。注15) 参照。なおPDSの側は近年、統一戦線路線、すなわち「SPD-同盟90・緑の党-PDS」という左翼政権樹立を党の方針として提示するようになってきている。

71) Tagesschau, 11. Februar 1997.

72) 先のミュラー（議員団代表の一人）は、明示的にこの「緑のFDP」路線を否定している。彼女は「社会エコロジー的な改良政党なのか、それとも『エコFDP』なのか？」と問題を立てた上で、前者の道を採用すべきことを訴えている。何故なら後者の道は、「社会的・民主的な社会という理想との決別と同義」なのであり、「自由」の概念を「緑色の塗料と中間層のための市民権政策をまぶした『営業の自由』に還元してしまう」道だからである。K. Müller, a. a. O., S.22.

73) H. G. Betz, *op. cit.*, pp.210-211. ビーデンコップは、CDU内の左派ないし近代化派の著名な論客の一人（新しい社会問題、新しい助成原理の提唱者の一人）である。結局同選挙はCDUの圧倒的な一人勝ち（得票率58.1%）に終わった。

限り⁷⁴⁾、この政権戦略は多くの支持者にとって「裏切り行為」と映るはずである。

同盟90・緑の党の政権戦略の基本は、現在もあくまでSPDとの「赤-緑連合」である。ただし政党間関係におけるポジショニング（現在の「緑の左翼政党」という位置から「緑のFDP」の位置まで）については、今後の「新しい党内論争」の行方が注目される。連合ゲームの上でのより大きな不安定要因は、むしろSPDの政権戦略の行方であろう⁷⁵⁾。「新たな3党制の出現」から「4ないし5党制の定着」までの可能性も開かれている。「新生ドイツ」の政党制には今しばらくの「過渡期」が必要なのであろう。

5. 終わりに

「緑の党はもはや、その政党としての『新しさ』を喪失し、『ノーマルな』議会政党に退化（ないし進歩）したのであろうか。筆者は、そうした単線的で一面的な評価の仕方をとらない。彼等は今なお『オルタナティブな政党』としての可能性を有しているものであり、そこに彼等の苦悩もあれば希望もあるというのが筆者の見方である」。

この評価を筆者は依然として変えていない⁷⁶⁾。つまり本稿で検討してきた統一ドイツの同盟90・緑の党の軌跡も含めて、緑の党の歩みを「オルタナティブ政党の試行錯誤」ないし「成熟」の過程として把握するということである。ただしこうした評価にかかわって、また同党の今後を展望する上で、さらに詳細に検討すべき課題は残されている。別の言い方をするなら、確かに同盟90・緑の党には、議会政党としての成功ゆえの「危うさ」が存在するのであり、その現れ方次第では同党の未来は「成熟」としてではなく、「単なる現実化」ないし「陳腐化」として評価されることにもなるだろう。

74) 「黒-緑」をめぐる議論は当然のことながら、CDUの現状及び将来的な刷新の可能性をどう評価するかに大きくかかわっている。例えばババダキスは、リタ・ズュースムート（新しい諸争点、とりわけ女性問題に理解のあるCDU内「良識派」の代表で、左右を問わず国民的な人気を誇る女性政治家）の存在を例に挙げて、党内保守派に対する「近代化派（モダニスト）」の「対抗力」を実質的なものとして評価している。先のミュラーは、「ズュースムートのCDU」などは単なる「蟹気楼 Fata Morgana」だという判断に立つ。だから「黒-緑連合には実体がない」のである。ただし彼女は地方レベルにおける「黒-緑連合」については一定の理解を示している。それによって「化石化したSPDの独占が打破される」場合に限って「意味がある」というのである。Elim Papadakis, "Green Issues and Other Parties: Themenklau or New Flexibility?," in Eva Kolinskuy, ed., *The Greens in West Germany*, Berg, 1989, p.68. K. Müller, a. a. O., S.21.

75) シャルピングからラフォンテーヌへのSPDの党首交替（95年）は、政権戦略という意味ではとりあえず同盟90・緑の党にとっては朗報だろう。ラフォンテーヌは党内「エコ派」の代表的指導者であり、早くから「赤-緑」の提携に理解を示してきた。ただし選挙での競争においては、同盟90・緑の党にとってむしろ不利に作用する可能性が高い。以前からラフォンテーヌは（その立場の近きゆえに）「グリーンキラー」としても知られており、現に彼の地元であるザールラント州は一貫してSPDの牙城であり、緑の党は低得票率に甘んじている（90年の州議会選挙で2.6%、94年でも5.5%）。またラフォンテーヌがそのまま首相候補になるか否かも現段階では流動的である。なおその首相候補としても名前が挙がるシュレーダー（同じくSPDの牙城であるニーダーザクセン州の首相で、先のシャルピング、ラフォンテーヌと並ぶ党内御三家＝「トロイカ」の一人）が、最近「SPDは98年選挙に向けた政権構想について旗幟を鮮明にすべきだ」と発言して話題になっている。その際彼は、最も可能性の高いパターンとして「赤-緑」連合を示した。Tagesschau, 16. Jili 1997.

76) 丸山「オルタナティブ政党」, 105-106頁。またその含意について、より最近の論稿である次の文献も参照。丸山「新しい政党」, 191-193頁。上記「オルタナティブ政党」論文でも触れているが、こうした評価はもちろん、「理念に殉ずることを潔しとしない」、すなわち原理的な意味での「改良主義」の立場に立脚してのそれである。

いかなる「改良」なのか？

まず検討すべき論点は、同党が今後「いかなる改良政党」としてその独自性を維持していくのかである。「エコロジー的・社会的な改良政党」への道を選択したことによって、既成諸政党との、とりわけSPDとの政策・イデオロギー距離は縮まった。一方で緑の党の躍進のインパクトも手伝って、今やすべての政党が多かれ少なかれ「緑化」しているのである。従って同盟90・緑の党は今後「既成諸政党との差異化の要求」と、「政権担当能力の証明（実現可能性の提示）の要求」との間で以前よりも困難な舵取りを迫られることになるだろう。当面は「社会」エコロジー的で「より穏健な」改良政党であるSPDに対して、社会「エコロジー」的で、「より強力な」改良政党として向き合い、また提携することになるのであろう。もちろん問題はその中身である。

ただし「実現可能である」ということは必ずしも「現実的（現状追隨的）」ないし「穏健」であることを意味しない。「前向き（未来先取りの）」、「先進的」、その意味で「ラディカル」であると同時に「実現可能」でもあり、また長期的にはむしろ「現実的」であるような政策構想があるはずである。とりわけ「孫子の代にまで及ぶ」環境政策の分野においてはそうであろう。だとすればここで問われているのは、彼等自身が表明している次の様な政治的姿勢の真価であろう。「(いわゆる「エコ・社会的な税制改革」構想を例示して) こうした例は、同盟90・緑の党が時代の先を行くことを恐れず、自らの投票者の唇の動きを読み取るのではなく、むしろ自らの投票者に挑戦しているのだということを示している」⁷⁷⁾。

単なるクライアントの「御用聞き」ではないというのだ。この志の高さの内実が試されている。同党が代表している「利益の質」から考えれば、あるいは「具体的、個別的な利益媒介に依拠しての支持調達」が元々困難であることを考えれば⁷⁸⁾、相対的にはあるが、同盟90・緑の党にはより大きな可能性が開かれているはずである。

いかなる民主主義か？

もう一つの論点は、同盟90・緑の党が、今後「単なる議会内政党」への道を歩むのか否かという問題である。確かに既に述べたように、議会主義論争の決着はついた。同党はもやは「単に他の可能性が欠けているがゆえに、より小さな必要悪にかかわるようにして」ではなく、「市民的な議会制民主主義を原理的に受け入れた」⁷⁹⁾のである。ただしこれは、彼等が求める「民主主義」が「議会制民主主義に還元された」ということと同義ではない。彼等は依然として「あらゆる生活領域における民主主義」を要求しているのであり、彼等の目標は「国家と社会の包括的な民主化」であり、彼等にとって「個人的・共同的な自己決定は、生き生きとした民主主義の重要な構成要素なのである」⁸⁰⁾から。

この問題は、もちろん政策の上でも問われる（同党は実際に直接民主的な諸制度の拡充、また経済・社会領域における共同決定制度の拡充などを要求している）のだが、「運動政党」としてスタートした緑の党の場合には、とりわけ「政党と様々な社会運動との関係」のあり方においても問われることになる。彼等自身は先の「ノイミュンスター大会」においてこう宣言していた。「古い緑の知恵、すなわち『議会政治は街頭における議会外的諸運動によって支援さ

77) Bündnis90/ Die Grünen, "Von der Protestpartei zur Gestaltungspartei." 注3) 参照。

78) 筆者の別稿参照。丸山「新しい政党」, 192頁。

79) Gerhard Gräber, "Alternative Expertokratie statt mehr Demokratie? Über den demokratischen Wert grüner Regierungsbeteiligungen," in Winfried Thaa / Dieter Salomon / Gerhard Gräber (Hrsg.), *Grüne an der Macht*, Bund-Verlag, 1994, S.64. (以下同論文集をGrüneと略記)

80) Bündnis90/ Die Grünen, *Politische Grundkonsens*, S.27-29. 文献の性格に関し注52) 参照。

れる必要がある』という知恵は、『危険社会』の時代にあっては新しい緑の知恵、すなわち『議会的・エコロジー的改良政治には、就業世界及び生活世界における支援（研究所、講義室、編集室、職場大会・・・）が必要である』によって修正されなければならない⁸¹⁾。

こうした彼等の認識の変化は、運動の側の「専門化」、また「告発型から対案提示型へ」といったトレンドにも対応するものであり、基本的にはまさに「オルタナティブ政党の成熟」の文脈で把握される。同党の場合、他党に比して少なくとも規約上（党内論議の公開性の点で、また運動、専門家と議員団とを媒介する政策分野ごとの「ワーキング・グループ」の設置、また先述した「フリーの協力者」資格の公認などの点で）「社会に開かれている」ことは確かである。ただしもちろんここでも問題はその実態である。具体的に同盟90・緑の党の政策決定過程（また地方や州レベルで政権参加をしている場合には統治ないし執行の過程も含めて）においてどれだけ「新しい知恵」が生かされているのかが検証されなければならない。

ただし、単純な「新しい知恵」の賛美、その全面化は別の「危うさ」を招く。何故なら当事者の全き善意にもかかわらず、客観的には「より多くの民主主義」に「代えて」、要するに「オルタナティブな専門家主義」、もっと言えば「オルタナティブないし対抗的なエリート主義」を導入することにもなりかねないからである。実際に同党の政権参加の評価をめぐって、次の様な問題提起がなされている。すなわち「緑の政治は、専門化されたエキスパート（例えばエコ研究所）の新しい諸集団を共同作業に取り込むということに限定してしまえるのか？その他の点では国家と市民の間の関係を変更なしで再生産させながらも（下線は筆者）⁸²⁾。「国家と社会の包括的な民主化」を要求する同党は、こうした問題提起に正面から答える必要があるだろう。もちろん答は「否」であろうが、だとすれば「いかに」してか？またその回答の中でも「政党が」果たすべき、また果たしうる役割とは何であろうか？

前者の論点に関しては、とりわけ同盟90・緑の党とSPDの綱領・政策の本格的な比較分析が、また後者の論点に関しては、同党と様々な社会運動の関係の具体的分析と、それを踏まえた「新しい政党イメージ」の未来先取的な提示が求められている⁸³⁾。いずれについても後日を期することとしたい。

81) Die Grünen, *Erklärung von Neumünster*, 1991, S.5.

82) Wirfried Thaa, "An der Schalthebeln der Landespolitik," in *Grüne*, S.29-30.

83) 筆者の別稿は、「新しい政党イメージ」提示のための準備作業に当たる。丸山「新しい政党」、167-195頁。